

学ぶ意欲を高め、実践的な行動力を身につける国語科の学習

～「ことば」に対する感性を磨き、深く追求する国語科学習～

鳥取大学附属小学校 神崎 邦子・長石 彰・林 多恵子
鳥取大学附属中学校 中尾ゆみ子・久住 薫・渡邊 裕子
共同研究者 小笠原 拓(鳥取大学)

1 はじめに

「国語力はすべての教科の基本となるものであり、その充実を図ることが重要である。」

昨年 10 月に中央教育審議会より出された「新しい時代の義務教育を創造する（答申）」の中で、こう明記された。国語力をつけることが、今、義務教育での早急な課題となっている。これらは、1995 年度から文化庁が行っている「国語に関する世論調査」での「国語力低下」や OECD（経済協力開発機構）が実施した学力調査（生徒の学習到達度調査「PISA」）での「読解力低下」という結果が背景にある。その中で「国語力」「読解力」の低下が指摘され、国語について多くの論議を呼んだ。けれども、ここで注意しなければならないのは、現在求められている「国語力」「読解力」とは、いかなる能力なのかということである。



文化審議会答申では、「これから時代に求められる国語力」の構造を、

考える力、感じる力、想像する力、表す力から成る、言語を中心とした情報を処理・操作する領域

考える力や、表す力などを支え、その基盤となる「国語の知識」や「教養・価値観・感性等」の領域

と捉えている。 は国語力の中核をなすものであり、言語を中心とした情報を「処理・操作する能力」としての「考える力」「感じる力」「想像する力」「表す力」の統合体として、とらえることができるものとしており、 については「 の諸能力」の基盤となる国語の知識等の領域であるとしている。この 2 つの領域は、相互に影響し合いながら、各人の国語力を構成しており、生涯にわたって発展していくものである。

また、PISA 調査においても、「読解力」すなわち「Reading Literacy」を「自らの目標を達成し、自らの知識と可能性を発達させ、効果的に社会に参加するために、書かれたテキスト

を理解し、利用し、熟考する能力」と定義している。つまり、従来、国語教育等で用いられてきたような「文章を読んでその意味を理解する」ことに加えて、それらの情報について、「解釈」「熟考・評価」「論述」することを含むものとして、「読み解き力」が捉え直されているのである。

本校の児童・生徒の実態として、所謂これまでのような「文章読み解き」、すなわち文章や資料の内容を読み取ったり、意味を理解する能力については、従来から比較的高いものであった。

さらに「実践的な行動力」に焦点をあてて研究を進めていく中で、自らの目的にあわせて資料を探したり、必要な情報を取り出したりする能力についても、向上の兆しが見られる。しかしながら、得られた情報を「解釈」し、それについて「熟考・評価」したり、「論述」したりする、本校で言うところの「的確に判断する力」「自分を生かす力（表現力）」の面においては、十分身についていない児童・生徒が少なくない。その背景には、読み解きの効率性ばかりに力点があかれていたことや、想像力（イマジネーション）を働かせて読むことが十分になされていなかったことなどが考えられる。

しかし、本校国語部の研究テーマでもある「『ことば』に対する感性を磨き、深く追求する」能力とは、正に情報をただ取り出し、読み取り、理解するだけではなく、その背景について自分なりに「想像」「解釈」「熟考」、さらには「論述」することができるような力を指している。また、そのような過程を経た上での行動こそが、本当の意味で「実践的な」ものと言えるだろう。このことは、学習指導要領国語科が求めている、場（目的や相手、状況や場面、方法などが具体的である時空間）の中で、効果的に言語を運用する能力の育成に関わって、特に課題のさまざまな制限や条件に応じる能力の育成にもつながるものである。とするならば、この「想像」「解釈」「熟考」「論述」することができるような力、つまり、自分の経験や知識をもとに、的確に判断し、自分の意見を述べたり、書いたりする力を育成する授業構成を考え、実践していくことが本校国語科における課題であるといえる。また、授業の中で具体的な学習の場を設定し、本校の課題となっている「かかわり合う力」「適切に判断する力」「自分を生かす力」を育成していくことにも取り組んでいく必要がある。

このような現状認識にもとづき、昨年度に引き続い、「学ぶ意欲を高め、実践的な行動力を身につける国語科の学習～『ことば』に対する感性を磨き、深く追求する国語科学習～」というテーマのもと、主に授業構成に視点を当て、具体的な研究・実践を進めてきた。

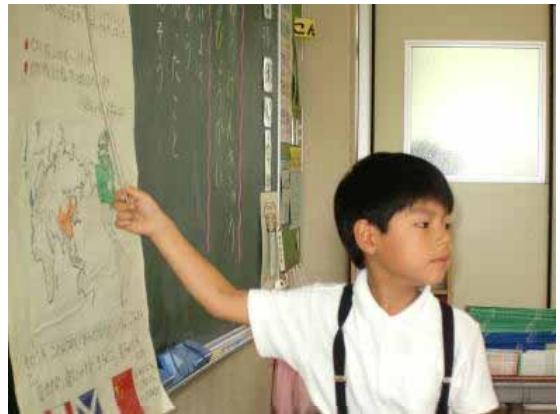


2 本校国語科の取り組み

（1）国語科学習のねらい

本校では、以前より、国語科のねらいを「ことばを使って思考、想像し、ことばによって他者とコミュニケーションすることを通して、世界や他者、自己を認識し、表現する力を育てる」としている。

本校研究主題における「実践的な行動力」は、「基礎・基本に支えられた知識や理解を生かし、自分を生かすために、自然・社会・人に積極的に働きかけようとする行動力」つまり、「学んだことを自分の生活に生かす力（生きてはたらく力）」であるが、本校国語科においては、前述した「ことばを使って思考、想像し、ことばによって他者とコミュニケーションすることを通して、世界や他者、自己を認識し、表現する力」を、本研究における「実践的な行動力」と考えている。PISA 調査における、「テキスト」も、言語を中心とした情報だけでなく、自分とかかわる「世界」や「他者」、つまり自分の外側にあるすべてのものととらえた。



子どもたちの「学ぶ意欲」を高め、「実践的な行動力」を育てていくには、しっかりと「基礎・基本に支えられた知識や理解」を身につけさせることが大切である。国語科の授業の中で、「基礎・基本」を学んでいく際に、その学びをより豊かにし、意味を深め、拡げ、子どもたちが充実感や満足感を得られるような「活動」や「課題」を設定することができるならば、そのことが子どもたちの「学ぶ意欲」を引き出し、「実践的な行動力」を育んでいくことにつながっていくはずである。

（2）国語科の中で育てたい力

国語科の学習は、子どもの内発的な興味・関心、あるいは問題意識を契機として、「聞く」「話す」「読む」「書く」などの具体的な言語活動として成立する。しかも、それは、国語科以外の教科・領域においても必要な活動である。

本校国語科においては「国語力」「読解力」の低下が指摘され、「これから時代に求められる国語力」が提言される以前より、国語科の中で育てたい力として、「認識し、表現する力」「思考し、想像する力」「コミュニケーションする力」「ことばで自他の言語運用をモニターする力」の4つを挙げ、日々の実践に取り組んできている。

認識し、表現する力

「ことば」を通して考えるということからも、国語科において認識能力を育成することは自明のことである。「表現する力」とは、ことばによる自己表現の力である。つまり、自分の欲求や思い、自分らしさを自分のことばによって表現することである。それは、自己実現にもつながっていくものであると考える。

思考し、想像する力

自己や他者、世界を取りまく問題を把握し、解決していくために、自己と対話し、論理的に考えを深めたり、イメージをふくらませたりする力を養うことが重要である。

コミュニケーションする力

自己と他者との通じ合い、自己の内部でもう一人の自分と対話することによって、互いや自身の考えや感情を深めたり、広めたりすることにはたらくのがコミュニケーションする力

である。現代は、立場の異なる様々な人々とコミュニケーションすることによって、自他のよさを生かしながら、相手の立場にも立って考え、共に生きていこうとすることが必要な時代になってきている。

ことばで自他の言語運用をモニターする力

自分や他者の言語運用を見つめ直し、評価していくメタ言語能力（言語を意識化する能力）である。言葉について考えることができるようになることは、その後の、言語をより正確な形で理解、運用していく上で重要なステップとなる。よりよい言語生活は、よりよい人間関係を築くことに通じる。それはさらに、よりよい生き方や自分づくりへつながっていくであろう。この意味からも、言語運用をふり返り、評価する力を身につけさせたい。

3 授業づくりの視点

ここで改めて、本校国語科における「『ことば』に対する感性を磨き、深く追求する国語科学習」について、「授業づくり」という視点で整理しておきたい。

（1）学級づくり（かかわり合う力）

本校国語科における課題として、自分の経験や知識をもとに、的確に判断し、自分の意見を述べたり、書いたりする力を育成する授業構成を考えること、授業の中で具体的な学習の場を設定し、本校の課題となっている「かかわり合う力」「適切に判断する力」「自分を生かす力」を育成していくことを挙げたが、その「授業づくり」を行う上での基盤が、ここで言う「学級づくり」である。

「学級づくり」においては、どんな発言や行動も尊重され、これまでの経験や知識が生かされるような学級、一人一人の存在が認められ、いつも先生や友だちに肯定的に評価されるような学級をめざす。そのために、横のつながりを大切にしていきたい。一人で考えたことをもとにして、グループで話し合い、話し合われたことが全体の場で話し合いの材料となっていくというような、子ども同士の学び合いの機会と場を工夫した授業づくりをしていくことが大切である。子どもと子どもが向き合った学習形態が、授業の中に計画的に取り入れられていくことによって、学び合う学習集団ができると考えられる。かかわり合いは、子ども同士、または子どもと教師などいろいろ考えられるが、本校の研究テーマ副題にあげている「かかわり合う力」は、授業を通して子どもと子どもがお互いの意見を尊重し、高めていくことを重点として考えている。本校では、子ども同士のかかわり合いがもてる場面を授業の中に意図的に設定し、継続的に実践していくことで、かかわりあう力を高めていっている。信頼に支えられた、子どもたち同士のかかわり合いのある学級の中で、「ことば」に対する感性は磨かれ、自分の経験や知識をもとに、的確に判断し、自分の意見を述べたり、書いたりする力が育まれていくのである。



(2) 授業づくり

教材(学習材)の工夫と開発

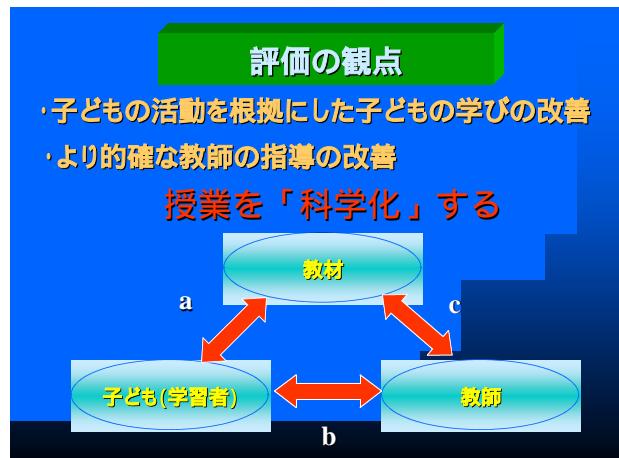
子どもたちの「ことば」に対する感性を磨き、「生きたことばの働き」を育てていくためにも、人間としての成長につながる価値あるものをそれぞれの発達段階に応じて主題や教材(学習材)として選び、授業を構成していくことが必要である。

教材の選定に際しては、「教材」「子ども」「教師」の三者間の関係から考えて行う。「教師と教材」の観点では、教師の教材についての解釈をはじめとして、学習者にとって必要な教材であるかどうかなどの分析を行う。「子どもと教師」の観点では、教師が子どもたちにどのような態度、学び方を身につけてほしいのか。前時までにどのような見方、考え方、学び方をしてきたのかなどを振り返っていくことで、選んだ教材が適切なものであるか確認していくことができる。そして、「子どもと教材」の観点では、授業の中で位置づけられた活動や課題に対して子どもはどのような反応をするのか、その反応に対して、教師はどのような支援を行えばいいのか、と考えることで、教材のさらなる選別などが進んでいくのである。

子どもたちの「学び」の質を高めていくためには、価値ある主題や教材(学習材)の工夫と開発が重要なポイントとなる。時には、複数の異なった視点や形式の教材(学習材)を組み合わせるなどの工夫を行い、多様な活動を取り入れた単元構成にすることも必要になってくる。授業の中では、「ことば」に対する感性を磨き、深く追究していくための教材(学習材)としての価値を高めるための動機づけを行うとともに、「おもしろそうだ」「やってみたい」と思う魅力ある言語活動、豊かな言語活動が展開できるような学習活動の工夫が必要となる。

目標が明確となった学習活動

魅力ある言語活動、豊かな言語活動を展開していくために、学習指導要領の内容や年間指導計画・評価計画をもとに、「ことば」の力の育成を重点とした、目標が明確になった言語活動を計画していく。本校国語科の研究テーマは『「ことば」に対する感性を磨き、深く追求する国語科学習』であるが、学習活動の中で「ことば」の力を育てることを意識した目標設定を行っていく必要がある。「教材」「子ども」についての分析をふまえた上で、この教材ではどのような言語活動を展開し、どのような力が身につくようになりたいのか等、教師の目標を明確にしておく必要がある。テキストの「解釈」「熟考」をしたり、「想像力」を働かせて読んだりする活動を意識的に組んだ目標設定、教材中の「ことば」だけでなく、自分で「ことば」を使って書くなどの活動を重視した目標設定などにも取り組んできている。



もちろん教師だけでなく、子どもにも学習についての見通しを持たせた上で学習活動に取り組ませていきたい。子どもたちが主体的に学習を進めていく意欲を高めるために、子どもたちとの話し合いにより、学習のねらい、学習計画を決めていき、その中で見通しをもって学習していくという態度を育てていくのである。そのためにも、従来の教師主導の計画や到達目標を、子どもの側からとらえ直し、再構成していくことも必要である。

支援と目標達成

これまで触れてきた明確な目標設定のもと、子どもたちは授業での「活動」と「課題」を通して問題解決へと向かい、それぞれの「学び」を深めていく。そのためには、問題に対して子どもたちはどのような反応（活動）をするのか、どのような課題を取り上げて思考、判断するのか、教師は具体的にどのような支援を行っていくのか等の具体的な見通しをもって、子どもたちとかかわっていくことが大切である。学び合う中で、最終的に子どもたちが「書けた」「話せた」「わかった」「なるほど、納得できた」「やり遂げた」という満足感を得られるためにも、目標達成に向けての支援を具体的に考え、個々に対し、また全体に対して確実に行っていくことが必要である。



本研究における「支援」とは、本時の目標達成に向けてよりよく「活動」を推し進め、「課題」を解決するための教師のはたらきかけとしている。十分な教材研究、明確な目標・学習計画、継続的な子どもの姿の見取りにより、子どもの陥りやすい困難や間違いは予測ができる。そうした上で、目標達成のための具体的な支援を考えていくのである。しかし、子どもたちの学習状況が教師の予想と違っていたり、子どもたちが本来の目標と異なった方向に動き出したりすることも当然起こり得るので、軌道修正を隨時行うことも必要である。それらの積み重ねが、教師自身の指導の具体的な改善につながっていくのである。具体的な支援が行われた授業の中で学び合い、目標達成という満足感を味わわせることにより、さらに学ぶ意欲を高めていくことができると言える。

また、「国語」の学習で身につけたことを生かすためにも、総合的な学習や他の教育活動との関連も考え、情報の集め方、調べ方などや報告や発表、討論の仕方など配慮することも必要である。そして、その積み重ねが、国語科における「実践的な行動力」つまり、国語科の本質である「ことばを使って思考、想像し、ことばによって他者とコミュニケーションすることを通して、世界や他者、自己を認識し、表現する力」となって表れ、生涯学習へつながっていくと考える。

以上、本校国語科における『ことば』に対する感性を磨き、深く追求する国語科学習について、「授業づくり」という視点で整理してみた。もちろん、この「授業づくり」は、共通理解のもと全校での取り組みが不可欠となる。本校では小・中学校9年間の連続したカリキュラムの中で取り組んでいくよう研究・実践を行っているところである。

4 今後の課題

国語科における「実践的な行動力」について

本研究では、国語科における「実践的な行動力」を「ことばを使って思考し、想像し、ことばによって他とコミュニケーションすることを通して、世界や他者、自己を認識し、表現する力」と考えて実践を試みた。まず求められたことは、私たちが行っている国語科の授業について見直すことであった。母語である国語を子どもたちは日常的に使用しており、また国語科は「ことば」の学習でもあるので、授業を行っていく中で自然に「実践的な行動力」が育成されるのだという不遜な考えを、私たちは知らず知らずのうちにもつてしまっていたのではないだろうか。この3年間、研究・実践を進めていく中で、「実践的な行動力」は、明確な目標設定のもと、具体的な「活動」「課題」が学習活動の中で行われない限り育成することはできないと確信した。本時までの、また本時の授業の中での子どもたちの様相の見取りをもとに、具体的に支援を打っていくことで、子どもたちの「学び」は確実なものとなり、「実践的な行動力」へとつながっていく。今後、国語科の「実践的な行動力」の育成に対する具体的な授業構成を考えることや、そのための具体的な言語活動、有効な「課題」等を吟味し、小中9年間のカリキュラムとして構築していくことにも取り組んでいきたい。

国語科で育てたい力について

こここのところの社会生活の変化を見ていると、国語科で育てたい4つの力のうち、「コミュニケーションする力」や「ことばで自他の言語運用をモニターする力」を高める授業づくりの工夫が求められていると感じる。

社会生活は、人間と人間との関係によって成立しているが、その人間関係を成立させているのが「コミュニケーションする力」としての「ことば」力である。そのコミュニケーションを成り立たせている「聞く」「話す」「読む」「書く」のすべてが国語科の学習活動の中で行われている。その学習活動の中で、友だちとかかわり合いながら、「課題」に向き合ったり、「活動」したりする場面を、できるだけ自然にどう仕組むかが難しいと感じている。本時の公開授業の展開の中にも、それぞれの授業者が共通して取り入れた場面であるが、子どもたちの中には、かかわりを苦手としたり、かかわりを横に広げていこうとしなかったりする子もいる。そんな子どもたちが、「かかわってよかったです」と思える場面を、今後さらに工夫していきたいと思う。

また、「ことばで自他の言語運用をモニターする力」についても、よりよい言語生活を志向していくことはよりよい人間関係を築くことにつながると実感させたい。現代の社会においては、価値観の多様化が以前にも増して進んでいる。未来を担う子どもたちには、多様な考え方や価値観をもった人々との間で伝え合い、相互理解を深めながら和やかで開かれた人間関係を作り上げていってほしいと願う。自分を取り巻く人々との和やかで開かれた関係、自己を肯定された中で育つ人間関係は、将来にわたって継続して実現されいかなければならないものである。その人ととの思いやりや尊敬に満ちた関係をつくっていくことが、実は国語科の授業と関係することを知り、友だちと真摯に学び合ってくれることを期待とともに、私たち教師自身も自分たちの「ことば」を見直し、教科によって開かれた人間関係を作る努力をしなければならない。「ことば」を用い、伝え合う能力の育成は子どもたちの

みならず，私たち大人にとっても喫緊の課題である。

「支援」について

「支援」は，本時の「活動」や「課題」から期待される子どもたちの様相をもとに行われるものであるが，子どもたちの様相は教師が予測する以上に多様である。それは，子どもたちの「国語力」の背景には，子どもたち一人一人が蓄積してきた世界があるからだと思う。文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」においても，望ましい国語力の一般的な水準を示そうとする場合には，

国語力は個人差が大きく，また，必要とする水準も個人によって大きく異なる。

国語力は生涯にわたって発達するものなので，どの時点における水準を示すのか。

国語力を構成している「考える力」などの水準を示す場合，極めて抽象的になる。

といったような難しい問題があるとしている。

多様な子どもたちの様相に対し，いかなる支援を向けることができるのか，子どもたちの具体的な様相を根拠にした授業の「評価」という視点で，今後も授業実践を重ねていかなければならぬ。それはさかのぼると，価値ある教材にどう出会わせるかといった，どのように授業を構成していくのかといった「教師の力量」にかかえわることでもあると感じる。子どもたちにどのような態度，学び方を身につけてほしいのか，ここまで国語力は身につけさせたいという，教師の目標をより明確にしていくことが求められている。

（引用・参考文献）

「これからの時代に求められる国語力について」（平成16年2月3日文化審議会答申）

OECD生徒の学習到達度調査(PISA)-調査国際結果報告書-（2003年），国立教育政策研究所（編集）

浜本純逸，国語科教育論，渓水社，2006